

## 50

## 林羅山の本草書受容について

武田 祐樹

二松学舎大学／東京大学

林羅山(1583～1657)と本草書との関係については、『本草綱目』をいち早く入手して、徳川家康に献上したという逸話が人口に膾炙する。ところが、かかる問題について、先行研究は概説的記述に終始しており、その内実はいまだ不明瞭である。例えば、林羅山の『本草綱目』入手についても、疑わしい点があること、小泉丹『日本科学史私攷初輯』(岩波書店、1934、p.404、431-436)の指摘する通りである。

そこで、本発表では、『本草綱目』について、林羅山『本草序例註』で引用された箇所を検討の俎上にのぼす。これにより、林羅山が本草学関係の著述において、実際に用いる『本草綱目』のテキストについて考えたい。

『本草序例註』の名は、『本草綱目序註』や『多識篇』、『南人言稿』などと共に、林鷲峯(1618～1680)が編纂した、『羅山林先生文集』(内閣文庫所蔵寛文2年刊本、請求記号：263-0058)所収「編著書目」『羅山林先生文集』附録巻4、第9丁裏)に見える。特に、『本草序例註』については、「未全備」との記述があり、林羅山が没するまで未定稿の段階にあったものと知る。

『本草序例註』は、林羅山の著述に間々あるように、写本でしか伝わらぬ。内閣文庫に林羅山自筆本とされる写本(請求記号：特112-0001)があるほか、杏雨書屋に写本1点(請求記号：杏雨-2525)、国立国会図書館にやはり写本1点(請求記号：特1-728)が伝わる。以下、内閣文庫本『本草序例註』を『本草序例註』と呼称する。

『本草序例註』は1巻1冊の写本である。茶色表紙、四つ目綴、外題左肩直書「本草序例註」とあるも擦れが甚だしい。毎半葉12行。遊紙を除き85丁。全篇漢文であり、多くは漢籍からの引用であるが、しばしば林羅山の見解が挿入される。首「重刊證類本草叙 陳鳳梧」(1丁表～8丁表4行)、次「重刊本草序 商輅」(8丁表10行～14行表)、次「重修證類本草序 麻革信之」(15丁表～17丁裏)、次「重修本草之記本古今写撰書」(18丁表～20丁表)、次「政和新修經史證類備用本草序」(21丁表～23丁裏)、次「序例」(24丁表～33丁裏)、次「本艸圖經序」(34丁表～44丁表)、次「開寶重定序」(45丁表～50丁表)、次「唐本序」(51丁表～68丁裏)、次「梁陶隱居序」(69丁表～85丁表)。印記「日本政府圖書」(陽刻朱字正方印、1丁表右肩)、「林氏藏書」(陽刻朱字正方印、1丁表右肩)、「淺草文庫」(陽刻双边朱字長方印、1丁表右下)、「江雲涓樹」(陰陽刻双边朱字長方印、一丁表右下)、「昌平坂学問所」(陽刻墨字長方印、85丁裏左肩)。

当初、内閣文庫に伝わる『本草綱目』の金陵本・江西本と『本草序例註』所引『本草綱目』とで、対校を行う目論見であり、実際に部分的には済ませた。しかし、『本草序例註』全篇にわたり、遂行する計画を放棄した。なぜならば、作業の途中で「本經云崑休圖經云紫河車綱目十七下」(『本草序例註』18丁表)および「綱目十八下通艸有細々孔兩頭皆通故名即今所謂木通也」(『本草序例註』32丁表)との記述を発見したためである。

これにより、少なくとも『本草序例註』において林羅山は金陵本を、もしくは金陵本のみを、用いてはいないことを確認した。というのも、金陵本は巻17・巻18を上下に分割しないからである。今後は、書物の形態のみならず内容面から、『本草序例註』の特色を考えて行きたい。

[本研究は武田科学振興財団杏雨書屋 研究助成「日本医史学における林羅山の歴史的位罫づけ—『本草綱目』受容に着目して」による成果である]